

〔第20号発行記念掲載〕

渋谷氏五族の消長

入来院 貞子

渋谷氏の下向

一二二一年、源氏三代で断絶後、後鳥羽上皇が倒幕の挙兵をしたが、敗北して隠岐に流された。承久の変である。渋谷氏は幕府方として功績があり、一二四七年の三浦・千葉氏の討伐にも手柄があったので、千葉氏の所領だった東郷・祁答院・鶴田・入来院・高城の諸郷を与えられた。

当時は代官を派遣して知行させるのが一般的だったが、千葉氏の代官が悪政で領民を苦しめた愚を繰返さずに、領主権を確立させる必要があったこと、北条氏が自分の地位を

確立するために、有力な功臣を次々に除いていたことに、危機感をもって自家の存続を図ったことの二つの理由で、次男以下を薩摩に下向することにしたようである。(川崎大十著『渋谷党の足跡』による)



渋谷氏五族に与えられた川内川下流域

一二四八年春、兄弟はそれぞれ与えられた領地に到達する。しかし平穩に領地を手に入れた訳ではなかった。

渋谷氏下向以前の川内川流域

平安時代は中央から任命された国司・郡司によって治められていたが、平安末期には律令制が衰退し、自衛が必要となつて各地に武士が台頭して実質的領主として支配していた。この地方の主だった支配者

- ① 伴姓武光氏
- ② 大前氏
- ③ 大藏氏
- ④ 宮里氏

鎌倉初期に幕府は薩摩・大隈・日向の守護として島津氏を任命し、川内地方には千葉常胤を地頭に任命した。当時は任命されても実際は代官が差配していた。千葉氏の代官が非道狼藉を働き、その取締りを命じた文が残つ

ている。

前述の土着の領主も次第に統合されて行くが、渋谷氏が下向した当時の川内川下流域は、こうした混乱のさ中であつた。

東郷氏

東郷氏は五兄弟の一番年長の実重に始まる。所領は、薩摩川内市東郷町全部・田海・白浜・中郷町、それに現さつま町の二渡・白男川・泊野であつた。

下向したものの、中心は大前氏が押さえていて、車内村（田海町）の館に居を構えた。本城の鶴岡城を手に入れたのは六代氏親の頃だったらしい。鶴岡城は、地形を巧みに利用した薩摩川内市・さつま町の古城の中でも最も複雑な築城構造であるが、三巨城といわれた他の清色・虎居の二城に比べて一般に知られていない。

五代重親は大前氏を降すことが出来ない

ことを残念に思つて、弟に家督を譲り「自分は地下の鬼となつて敵を滅ぼすのだ」と言つて甲冑を着け葦毛の馬を鞭打つて淵脇山の土穴に駆け入つて自刃した。重親の墓の横には昭和十年八月に建てられた「東郷重親公仰靈之碑」という石碑がある。重親は、権現山の



鶴岡城跡
(薩摩川内市東郷町斧淵三ヶ郷)



東郷重親公の墓
(薩摩川内市東郷町斧淵小路)

紫尾神社に合祀されている。伝説によれば、重親は「自分が死んだら必ず靈験を表すからそこに祀ってくれ」と遺言を残していた。その後権現山のハゼの木に夜な夜な神灯が現れたので親大明神としてここに祀った。その後その木は枯死し、植えなおしたものが現存する。

以来、東郷氏は葦毛の馬は使わず、箸にハ
 ぜの木を使用しなかったということである。

十三代重信に至り、本領の他に高城・水引
 一円も領有、十六代重尚は高城・水引・湯田・
 西片など二万石あったという。

その後島津氏との抗争で残るは入来院と
 東郷のみとなった。永禄十二年、重尚は入来
 院重嗣と計って、所領の東郷・高城・中郷・
 湯田・西片・京泊の地を献上して貴久に下つ
 た。

貴久はこれを許し翌年東郷の地を重尚に
 与えた。一五八七年、島津義久によって没収
 され、東郷氏は断絶した。

その支族は多く、また姓も変えた支流もあ
 って、現在各地に存続している。

祁答院氏

次兄重保は現さつま町の二渡・白男川・泊
 野・鶴田を除いた土地を与えられた。しかし

兄東郷氏と同じく大前氏が勢力を奮っていた
 ので、さつま町柏原に居住し、長岡城を手に入
 れた。所領を確保し虎居城に居住していた
 記録は七代重茂にある。

虎居城はU字に屈曲して囲んでいる東西
 4百メートル、南北1キロの広大な山城で、



川内川の対岸（北西）から見る虎居城跡
 （薩摩郡さつま町宮之城屋地）

中におきたの城・塩の城・中の城・松社の城
(本丸)・城内と続いている。

最北端の城内の下が八女瀬で、九代徳重の娘が川に落ち侍女七人も水死した所である。ちなみに彼女らの死体の上がったところが、樋脇川との合流点で、その地の戸田観音は彼女たちの慰霊のためと言われている。

菩提寺の大願寺には二十四基の石塔があり、昭和六十二年「大願寺跡墓石群」として県の文化財に指定された。

十二代重武は南部の始良方面に進出し、帖佐本城・新城・山田城を併領した。十三代良重になって、勢いは益々盛んになったが、島津貴久との帖佐岩剣城の合戦(一五五四年)に破れ、翌年始良から撤退した。島津氏はこの戦いで初めて鉄砲を使用したということである。

永禄八年(一五六五)良重は紫尾山で猪狩



大願寺跡墓石群
(薩摩郡さつま町柏原)

りをして越年し、戻つての正月の宴で泥酔していた所を薩州島津実久の娘で政略結婚していた夫人に懷刀で刺殺される。控えていた入来からの小姓、村尾亀三が屏風の上から夫人を刺殺した。ここに、祁答院家は十三代・三百十九年をもって断絶する。

支流は入来院の家臣となった家、黒木・大口に移住した家や苗字を変えた家など多く現存している。

虎居城はその後暫くの間、入来院氏に委ねられていたが、鶴田・柏原・中津川・久富木を含む十二村を与えられた島津義久の弟、歳久（金吾さあ）の居城となった。歳久が秀吉に咎められ切腹した後、貴久の弟の子忠長に与えられた。宗功寺の墓地はその家系のものである。

鶴田氏

鶴田氏初代の重諸は、実際は承久の変で戦死していたので、実際の下向は二代重行であった。多分五氏の中で最年少であったことから、比較的安定していた天領を領有することになったのだろう。

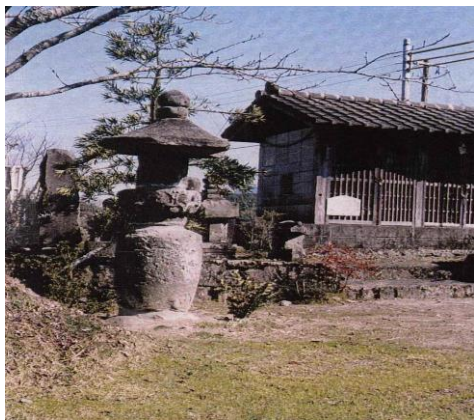
初めは鶴田郷全域ではなく、宮之城郷佐志・湯田・求名・曾木郷長野の四ヶ村を含む



鶴田城跡
(薩摩郡さつま町鶴田字古城)

地域のようなものである。

居城は、初めは宮之城郷佐志の大谷（うたい）に居住したが、その跡はない。重行はその後間もなく鶴田城を築いた。鶴田城は字古城と字求名にまたがる山地で、東西四五〇メ



鶴田氏の菩提寺・長福寺跡
(薩摩郡さつま町求名)

ートル、南北二〇メートルの規模を持つ。
鶴田氏の菩提寺は求名の下手公民館付近で、俗に寺屋敷と呼ばれている。国道二六七号の改修工事により石塔群十数基は下手公民館の庭に移された。旧薩摩町の文化財に指定されている。

渋谷氏の相模の鎮守五社神社を東郷氏と鶴田氏が奉祀している。鶴田では後年諏訪防

にある南方神社に合祀された。ご神体は木坐像で、五体が安置されている。

渋谷五族は下向以来渋谷党として、お互いに結束し、協力し合ってきたが、四代重成のとき島津氏が奥州家と総州家に分かれて抗争していたのに巻き込まれて分裂した。

鶴田氏が奥州家に着いたのに、他の四族は川内の総州家に付いた。奥州家は、大隈が本拠で、東側にあつた鶴田氏に影響力が強かったと思われる。



一三九五年、渋谷四族は鶴田城を襲った。氏久は鶴田重成を援け大合戦に及んだが、氏久に利あらず、入来山を越えて退いた。急迫

する渋谷勢に、氏久は兵を返して逆襲し、これを退け無事退却することが出来た。この戦を『山引合戦』という。（入来 of the 山を越えて兵を退却させたの意）



鶴田合戦古戦場跡
(薩摩郡さつま町鶴田)

一四〇二年、再び総州伊久と渋谷の攻撃を受けて、敗北。鶴田氏は断絶した。

歌誌「にしき江」主幹鶴田正義氏はその嫡流である。

高城氏

高城氏の初代重貞も実際は承久の変の折、戦死している。二代重秀の所領は川内川以北の高城郷・水引郷および阿久根（大川）の一部である。その三分の二に当る一六〇町が千葉氏の遺領であった。居城の妹背城は旧川内の城内にあり、武光氏が居城としていた。別称高城城、高城本城とも呼んだ。高城小学校の東北に位置する小丘で、東西二〇〇メートル、南北五〇〇メートルの平山城で、西側には三〇〇メートルの濠の跡が残っている。

重秀は高城郡北部の大河に居を構えた。武光氏を排除するのに時間がかかったと思われる。

他に水引城がある。御陵下町の本城を中心とした位置にあった。別称を屏風城・田島城と呼んだ。記録によると、一四〇一年総州島津守久から、当城と椿城（川内五代町）を

譲られたとある。

高城氏も三代重郷の弟が公安の役に出陣し、壱岐の島で戦死している。

その後高城氏内で内紛が生じ、兄弟が島津の総州家・奥州家に分かれて戦い、兄は追われて水引城に移り、弟が妹背城を奪ったが、間もなく島津立久に攻略され落城している。

一四八五年、薩州島津が南下し湯田城・水



妹背城跡
(薩摩川内市高城)

引城を攻略したので、城主重頼は城を棄て祁答院氏を頼って祁答院に奔った。高城氏の嫡流は水引の地も失った。

渋谷氏の総領東郷氏は、同族の高城氏没落の後、渋谷の地の回復を図った。本格的に妹背城を攻略、高城を併合した十四代重明は叔父重隆に高城を領有させた。重隆は高城氏を名乗り、妹背城を居城とした。



高城氏石塔群
(薩摩川内市高城)

東郷高城二代の重誠は優秀な人物として、『稚児ヶ淵伝説』がある。弟重貞は入来院重聡の養子になったが、重朝の誕生によって庶流の長男として所領一五町を与えられ松尾城を居城とした。しかし薩州島津と百次で戦い討死した。その後、東郷宗家に追われた兄の重誠も母方の入来院を頼って入来院の家臣となった。

菩提寺は前領主に続いて信興寺で、明治二年廃寺になり埋没していた石塔を後年高城小学校の裏手に集めたという東郷高城氏の石塔群があり、平成元年市の文化財に指定された。なお背後の裏山には墓石が散乱していて、渋谷高城氏のものが見つかるかもしれない。

入来院氏

下向した渋谷氏兄弟四番目の定心の領地は、薩摩川内市の入来町・樋脇町と旧川内市の久住・中村・楠元町であった。

この地は千葉氏の遺領であったが、大蔵種明の勢力下だったので、最初は樋脇町内の倉野に入り、次いで元村に館を構えたという。元村には定心が勧請願した妙見神社、諏訪神社がある。

清色城には四代重基か五代重勝のころと思われる。



清色城跡
(薩摩川内市入来町浦之名)

三代公重は、国難元寇の時代であった。第二回の来襲弘安の役には、弟の有重を軍代として、その弟致重・重尚とともに従軍させたが、三人とも戦死した。向山の重来神社に關ヶ原の戦いに戦死した十五代重時とともに合祀されている。

四代重基の時から南北朝の戦乱時代に入り、九州も入り乱れての合戦の日々となった。一三七二年、六代重門は高江郷峰城を攻め、城は陥落させたが、重門は城壁を登る時堀に落ち、敵の落す大石に兜を割られ戦死してしまった。その四百九十余年後地中から重門の碑が発見され、峰城内松嶺寺に建て直したが、その寺地に峰山小学校を建てるため整地をしたとき無くなってしまったという。

その後二百年ほどは、時折は和睦しながらも島津氏との抗争が続き、『山北の四賊』と呼ばれた。

七代入来院重頼のとき、島津元久に負けて清色城を明け渡したことがあったが、後に入った伊集院頼久に領民が全く懐かず、仕方なく入来院に返還したという。入来院氏が領民の信望を得ていたことを物語っている。

十一代重聡の時代は島津一族も乱れていて、伊作の島津忠良（日新公）は加世田と出水を領有していた薩州島津家の実久に勢力を阻まれていた。忠良は息子貴久の嫁に重聡の



戦国時代の島津本家と分家

娘を迎えた。そして連合して薩州島津に当つた。やがて忠良は加世田を攻略し、薩州家の出水の勢力も食い止めることが出来た。

十二代重朝の時代は入来院の最盛期で、川内の大部分と郡山、始良の辺りまでを勢力下に収めた。しかし強大になった入来院氏は疎まれ、忠良・貴久に攻められる立場になってしまった

貴久の三州統一は着々と進み、渋谷氏は力を失った。十四代重嗣の時代に、東郷重尚と今後の見通しを相談し、百次・平佐・碓山・高江・隈之城・宮里・京泊・清色の全領土を差し出して降伏することにした。貴久はこれを許し、清色を重嗣に与えた。その後も重豊の代に山田・天辰・田崎を失った。武士の数は変わらないのに領地は減ったので維新まで半農半士のつましい一族となった。

ともあれ入来院氏は、渋谷氏の中で縮小さ

れたとはいえ、唯一継続して同じ領地を護つて来た。それは全国でも入来院氏と人吉の相良氏のみという。

清色城

この山城は、東西一キロ南北七五〇メートル周囲二・八キロである。東・南・北の三方を周流する清色川を濠とし、七、八〇メートルの断崖は天然の城壁を形成している。城中



清色城本丸跡

に本丸・松尾城、中之城・西之城・求聞持城・物見之段などを始め広い段丘が多い。

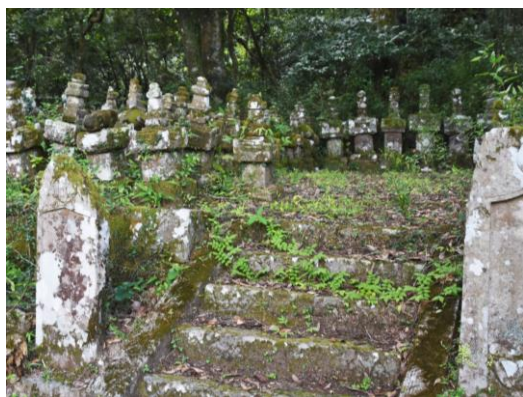
平成十六年国指定の山城となった。現存する武家屋敷群を身近に持つ山城は他にはないと言われている。

いくさ墓

戦乱の世、出陣するとき死を覚悟して生前に自分の墓を作ることがあった。これを逆修墓という。

文明（1469）から天正（1563）までの百余年間のもので、領主では重門・重茂・重豊・以下重嗣まである。

十一代重聡の時代、薩州島津実久は南下し、高城・水引・百次・山田以西を占領した。重聡はそれを奪回するため、重朝の生まれる前に養子としていた東郷重貞とともに、川内地方で激しい合戦を何回も行なった。この戦のために作られたものが多い。



いくさ墓

一五二八年村尾平次郎、翌年岡本八郎、そのまた翌年山口重昌、翌一五三一年四月には入来院重直といずれも身内の重臣を百次の上野城を攻めて戦死させている。同年六月総大将として出陣した東郷重貞は、兄重誠が付けてくれた東郷の重臣武元右京とともに百次溝口で戦死した。右京が白髪を振り乱して奮戦

したことが永利史誌に記録されているという。二人の戻らない悲しい逆修墓がいくさ墓にある。その後、十二代重朝が百次上野城を奪回した。

旦那墓

入来町元村に鎮座する妙見神社の近くに定永寺があった。この寺跡の奥にある墓で、右が七代重頼、左が十四代重豊の墓塔である。重頼は山引合戦の後島津元久を悩ませ、一旦は失った清色を武力でなく領民の支持によって回復させた。

重豊は、島津の家臣として浅い入来院家が存続出来るかの難題を血判状の提出でなんとか防ぎ、定着、安定させた外交の手腕の持ち主といわれている。義久の家臣となって、日向、水俣の合戦にも加わった。義久の従弟の島津以久の子重時を養子とした。墓塔は2メートルあまりで町内最大といわれている。



旦那墓

お石塔

明治の廃仏毀釈で跡形もなく消えた町内最大の名利寿昌寺の境内にある入来院家代々の墓石群を指す。

間口五間（9メートル）奥行き一〇間（18メートル）の石畳の上にぎっしり豪華な墓が建っている。

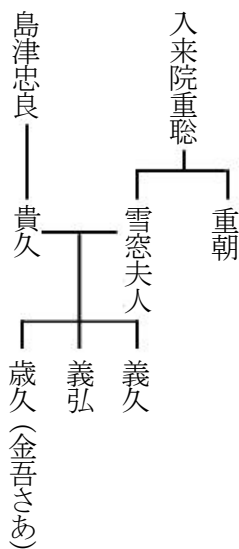


お石塔

一六六六年に歴代の寄せ墓を作ったのがこれである。石塔数四三基、うち十九基が石祠型豪華塔である。石に彫られた家紋を見ると島津家から嫁いできた妻の墓の方が夫よりも大きいものなどあるのが興味深い。

島津家と入来院家

重聡は薩州島津の南下を防ぎ、重朝は平佐・百次を奪回して、妹の婚家伊作島津家を大いに悦ばせた。そして「川内地方を好きなように奪え」と言ったが、入来院が強大になることは望まず、重朝を攻めることになった。島津家を中興させた義久・義弘、秀吉に逆らって切腹した歳久の三人の母は重朝の妹窓雪夫人で、重朝を排除することにした年の夏に死んだ。



重朝の子重嗣の時、島津氏に降伏する。その子重豊の妻は、貴久の弟忠将の娘だったが

男子がなく、妻の甥の重時が養子に入る。その重時は関ヶ原で戦死する。男子がなかったので、断絶させられた薩州島津忠辰の弟、重高があとを継ぐ。こうして、入来院宗家は島津氏と深く結びついて行く。この時代、存続して行くためにはそうした結びつきが必要だったと思われる。

義久の母追悼の歌

入来院史の入来院十四代重豊の項に旧紀雑録からの次の記述がある。

雪窓妙安大姉は、入来院重朝の妹にして島津貴久の夫人なり。今歳天正四年丙子八月十三回忌に当たり、その子義久追悼の和歌を詠して曰く

雪窓妙安大姉三十三回ことし八月十五日に相あたり侍りしは年季も是を限りなれば一人かなしき身にしみとをり時しもあれや秋や



『秀吉・義久和睦の像』（薩摩川内市、泰平寺公園）

は人のわかるべきと云ひおきしいにしえも思ひやられていとも露けき秋を追善に広済和尚詩をつくり手向給ひし其韻字を取りて試みに一首つらね侍るものなり

月にちるははその秋はほともなく

雪に向はんまとの山風 義久

雪窓夫人が亡くなったとき、義久十一歳、義弘九歳、歳久七歳であった。

義久が秀吉に降伏する前夜、伊集院にあった母の菩提寺、雪窓院で得度し、龍白と号したのだった。死を覚悟した義久の臉に去来したのはきつと母の面影だったであろう。

義弘にしても妙円寺など伊集院に戻ったことは、母への思いがあつたと考えられよう。

(庶流入来院家二十一代当主・入来院重朝夫人、平成二十三年五月二日逝去)



庶流入来院家・茅葺門（重要伝統的建造物群保存地区内）

補遺・第20号発行記念掲載について

炉ばたセイ談編集担当 下土橋 渡

入来院貞子さんは、平成十九年九月に『渋谷氏五族の消長』と題する冊子を作っておられた。消長とは、物事が衰えて消えるか伸びて盛んになるか、というなりゆきのことをいう。その冊子を、「炉ばたセイ談」第20号発行記念として、転載する形でここに掲載させて頂いた。それは、渋谷氏五族の下向後のなりゆき、つまり渋谷氏五族が下向した川内川下流域の歴史のなりゆきを知る上で、有用なというより、不可欠な興味ある資料だと思われるからである。

当時は地頭に任命されても代官を派遣して知行させるのが一般的だったが、渋谷光重は五兄弟を実際に薩摩へ下向させた。しかし、五兄弟が平穩に領地を手に入れた訳ではな

った。各地に土着の武士が台頭して実質的な支配を行っていた混乱のさ中の時代であった。たとえば、東郷氏の所領はその中心を大前氏が押さえていて、東郷氏が本城の鶴岡城を手に入れたのは六代氏親の頃だったそうだ。

下向以来渋谷党として、お互いに結束し、協力し合ってきた五族であったが、下向から約一六〇年後の頃、鶴田氏が五族より分裂し、四族との抗争の末断絶した。その後も島津氏との抗争の中で、高城氏、祁答院氏、東郷氏と断絶していった。

そんな中で入来院氏だけは、島津氏の軍門に下り、領地を減らしながらも、明治維新までの六二〇年余りに渡ってその社稷を全うした。

そのような渋谷氏五族の消長を知る上での貴重な資料として参考にして頂いたら幸いである。